

中世歴史記述における 理念と事実との分離

兼 岩 正 夫

シュペールル教授は、彼の⁽¹⁾中世史学研究史の中で、中世歴史記述の積極的評価は、専門の歴史家でなく哲学者や文学史家によって行われた、と言います。たしかにディルタイ、トレルチュ、クローチェなどは、中世歴史意識について我々に教える所少なくありませんが、その見方は主として、西洋の歴史思想の発展に対す中世キリスト教歴史観の意義を強調したものです。ジルソン⁽²⁾やレーヴィット⁽³⁾が近代歴史哲学の源を中世の神学的歴史観に求めているのも同様の立場でしょう。然し中世のキリスト教歴史観は、歴史記述に対して具体的にどの程度の明闇を与えているのでしょうか。キリスト教の理念は、中世の歴史家の語る事実のすみずみにまで滲透しているのでしょうか。トレルチュやドーソンの言うキリスト教統一文化は、中世の歴史記述にも実現されているのでしょうか。

これに関する疑問は、すでに中世史学史の研究者達により提出されています。たとえばリヒター⁽⁴⁾は、中世の歴史家はキリスト教に基く一般的態度と特殊の個性との間の矛盾の中にあると言い、ヘルティン⁽⁵⁾も、中世では歴史素材の形成と事実の過程が歴史の目標、意味の概念と無関係に見える、と言います。グルントマン⁽⁶⁾も、中世歴史観は歴史過程の中から見出されるものでなく、啓示と伝統によって決定されており、それが歴史過程の中で再発見され立証されるにすぎない、と言っています。

一口に中世歴史記述と言ってもその種類は多様であり、時代によっても相当の変化があること勿論です。一般文筆作品の展開に応じて歴史記述も

また中世初期は不振であり、中世盛期が最も華かと言えますが、特に12世紀は歴史に関する記述・考察がきわめて豊かな時期で、ヘーアはこの世紀を「歴史の生誕」と名付けています。文学史家ゲランクも、12世紀のラテン文学で歴史記述は第一位を占めていると言います。所で12世紀のあるいはひろく中世の歴史作品は、ほとんどすべて修道士の手に成るものです（シュライパーは、修道参事会の重要性を説いていますが）。ペトルス・ダミアニが“*ridiculse vani annales*”と言って修道士の教養から排撃した歴史が、それにも拘らず専ら修道士によって栄えたのは「歴史の皮肉」である、とゲランクは言います。スコラ学が司教学校、大学で華やかに展開しつつあった時、文化の進展から取り残されようとしている修道院で歴史記述は行われたのです。しかしゴルプレースによれば、修道院の中で歴史記述の仕事に従事したのは *dim figures* だと言うことです。キリスト教は最も歴史的な宗教だと言われますが、中世のキリスト教文化の中で歴史記述は、むしろ軽視された分野と言えるようです。スコラ学は一般に *Geschichtsfremd* だとされていますが、12世紀のスコラ学者の中で歴史的関心を示したのはジョン・オヴ・ソールズペリただ一人であり、しかも彼の歴史記述はその文筆活動の一小部分を占めるにすぎません。

ヘーアは歴史が生誕した12世紀について、ドイツ・イタリア人は歴史を考え、イギリス人は歴史を書いたと言います。12世紀の歴史哲学についてはすでにデンプがその重要性を指摘していますが、当時の歴史思想家たち、Rufert von Deutz, Hugo von St. Victor, Anselm von Havelberg, Hildegard von Bingen, Ekbert von Schönau, Gerhoh von Reichesberg, Otto von Freising, Joachim von Fioreなどの名をあげて見ますと、たしかにドイツ中心だと言えましょう。その歴史思想はアウグスティンにもとずく象徴主義的歴史神学です。12世紀歴史思想を代表するフーゴ・フォン・ザンクト・ヴィクトルによれば、歴史はキリストによってのみ可能となった神の救済史であり、世界の歴史は自然法、モーゼの法、恩寵の法によつ

て三分されます⁽¹⁵⁾。然し彼等の中で最も問題とされているのは、ヨアキム・フォン・フィオレのようです。これは彼の極端な精神主義が革命的な作用をもつと考えられるからでしょう。フィンクはヨアキムにより中世が破壊されたと言います。これらの象徴主義的歴史思想家達は、キリスト教理念によって歴史世界を構成するのに専らで、具体的な歴史事実を無視する、という批判が行われています。12世紀の歴史思想は歴史的関心でなくして形而上的、神学的関心の対象であったとされています。勿論オットー・フォン・フライジングのように、歴史の理念と歴史の事実とがある程度よく調和している場合もないことはありません。然し一般的に言えば、12世紀ドイツを中心とする歴史思想家達は、キリスト教理念によって歴史をアプリアに組立て、それに必要なだけ、あるいはそれにあてはまるように歴史事実を取入れた、と言えましょう。このような12世紀歴史思想の著しい展開について、シュペールルもシュナイダーもその原因を政教闘争に求めています。シュペールルは12世紀の歴史哲学は聖職叙任権争いなしには考えられないと言います。ヘーマは政教闘争もふくめて、彼のいう *politische Religiosität* の旧世界が崩壊しようとする危機の表現だとしています。社会史家ブルンナー⁽¹⁸⁾は宗教上の変革と共に都市の展開なども併せ考え、当時の歴史思想をひろくヨーロッパ社会史の一部として見ようとしています。ブルンナーの解釈は我々の興味をひきますが、中世歴史意識の展開を社会史的に説明するのは容易ではないと思います。

中世の歴史記述はしばしば *annales*, *chronica*, *historia* に三分され、アナーレースは鉱石、クロニカは精製された金属、ヒストリアはこれを細工した美術品とされることがあります⁽¹⁹⁾。然しこれは近代の史学から考えた分類で、中世の歴史家自身は三つの名称を内容と無関係に用いることが少くありません。謙虚な歴史家は立派な作品でもアナーレースと名付け、逆に術学的な作者はつまらぬ作品に誇大な名前をつけたとされています⁽²⁰⁾。中世の歴史作品の書名と内容との間には複雑な関係があるようですが、カロリ

ング時代のアナーレースが中世歴史記述の中で最も素朴なものであることは否定出来ません。歴史事実を一年毎に簡単に記入する歴史記述の形式はローマ時代にも認められますが、中世のアナーレースはそれとは別の起源をもつものです。復活祭の年毎の日附を計算した表の欄外にその年々の出来事を記入する風が起り、この記入が独立してアナーレースになったとされています。⁽²¹⁾アナーレースはイギリスで始まり大陸に伝えられ、メロヴィング時代にも書かれたと考えられますが伝わりません。中世のアナーレースで問題とされるのはカロリング時代のものです。カロリング時代のアナーレースについてはペルツが MGH の第1巻で論じて以来多くの学者が取り上げて来ました。最近も “Annales Metteuses friores” を中心とするホフマンの研究⁽²²⁾が出ています。これらの研究は作品の内容や文体からオリジナリティや依存関係を明かにしようとする歴史技術上の研究で、「失われ^{フエアローレネ}た作品」^{ス・グメルク}をめぐる論争や shorter annals と royal annals との前後関係に関する論争は有名です。それはアナーレースの史料としての価値を決定しようとする史料批判の問題に外なりません。ヒストリオグラフィーの方面から歴史作品として見た場合には、アナーレースは貧弱で無味乾燥な歴史記述として軽視されるのが普通です。然しアナーレースの問題はそれだけではすまないように思います。次にかかげるのはカロリング時代のアナーレースで最も古いとされている annales sancti Amandi の一部です。⁽²³⁾

751. Pippinus in regem unctus est apud Suessiones.

752. [Nihil]

753. Hildegarius occisus est in Saxonia.

754. Stephanus papa venit in Franciam

755. Pippinus rex cuw Francis in Italiam perrexit, Langobardos superavit. Carlomanuus obiit.

756. [Nihil]

757. Franci obsederunt Papeia.

たしかにそれは最も素朴で簡単な歴史記述といえましょう。然しこのようにただ事実だけをありのままに記述して行くことは、やはり歴史に対する一つの態度を示しているのではないのでしょうか。そこにはある種の歴史的精神が存在するのではないのでしょうか。しかもその精神は12世紀の象徴主義的歴史哲学者のそれとは極めて大きい距りをもつようです。歴史を理念によってとらえる代りに、これを事実によって示しているわけです。そして近代歴史学の系譜から見ますと、アウグスティーン的なキリスト教歴史哲学よりも、アナーレースに見られる卒直な事実の認識という歴史態度の方が一層重要のように思われます。アナーレース的な歴史精神が近代社会のもろもろの精神内容と結びついた時、近代史学が展開したと言えないのでしょうか。

象徴主義的な歴史神学が理念にかたより、アナーレースが事実の記述にとどまるのに対して、いわば兩者の中間に位するというべきものが世界年グエルトクロ代記ニークです。これについては最近フォン・デン・プリンケン(24)の詳細な研究がなされました。それはキリスト教によって初めて生み出された歴史記述のジャンルで、中世の歴史記述の中で最も特徴的な最も注目すべきものといえます。世界年代記はすでに古代末期から現れておりますが、その頂点はやはり12世紀です。個々について見ますといろいろの相違が認められますが、共通した基本構造を持っています。まずそれは聖書にもとづいて救済史を中心としています。年代記の初めは神による世界の創造ですが、稀にアブラハムから、またキリストの生誕から始めたものもあります。その後の時代区分は、神が6日間で世界万物を創造したという創世紀の記事にもとづいて世界史を6分するいわゆる Aetas-lehre によって行われます。ダニエル書による四帝国説も用いられることがありますが、前者に比べると問題になりません。世界年代記の終りは、ほとんどすべて作者の生きる現代までです。世界年代記こそキリスト教理念に滲透された中世記述の典型と見られる所以です。然し世界年代記において、果してキリスト教理念と歴史

事実との融合が行われているのでしょうか。世界年代記は世界の創造から作者の現代までを一つの歴史世界としてとらえているわけですが、彼の現代史を除いた過去の部分は他の史書から引用です。フォン・デン・プリンケン⁽²⁵⁾は世界年代記の間の依存関係をグラフで示していますが、それによりますと、ヒエロニムス、オロシウス、イシドルス、ベダが最も多く利用されています。作者自身のオリジナルな部分は、彼自身の現代史に限られます。世界年代記のあるものでは、作者の現代史の部分がきわめて大きいスペースを占めています。フォン・デン・プリンケンによりますと、ランベルト・フォン・ヘルスフェルトでは現代史が全体の5分の4、グレゴール・フォン・ツールでは3分の2、*Annales Quealimburgenses* では半分を占めています。これらの作品では作者の関心はこの現代にあるのであり、世界の創造に始まる過去の部分は単なるそえ物の如き感じをうけます。内容から見ますと、過去の部分が規模壮大な世界史であるのに対して、現代史になりますと一般に、作者の住む国、教会、修道院などの地方史に限定されてしまいます。中世の年代記は過去については世界的であり、現在に関しては地方的であるとされる所以です。⁽²⁵⁾オルデリクス・ウィタリスの「教会史」は中世の最もすぐれた歴史作品の一つとされており、現代史に関してもその視野はヨーロッパ的だと言われますが、それにも拘わらず、ヴォルター⁽²⁶⁾の言うようにやはりノルマン中心であることは否定出来ません。他の史書による過去の部分と作者のオリジナルな現代史の部分とでは、彼の歴史感覚にある種の相違があると言えないでしょうか。前者においては歴史の事実よりも文学上の伝承が問題であり、しかも世界史の図式はこの部分にふくまれているのです。後者における歴史記述は本質的にはアナーレスと同じものだと思います。世界年代記に対するキリスト教歴史観の影響は、大きい枠の設定にとどまり、個々の事実の記述にまで及んでいないように感ぜられます。

12世紀ドイツで象徴的な歴史神学が発展したのに対して、イギリスでは

実証的な歴史記述が栄えました。多数の歴史家が出ていますが、12世紀ではEadmer, William of Mamesbury, 13世紀では Matthew Parisが著名です。エアドマーはイギリス現代史を、ウィリアムは5世紀以後のイギリス史を書きました。マシュー・パリスは「セントルバン年代記」の代表的歴史家⁽²⁷⁾です。これらの歴史家達はドイツのように歴史哲学に関心を持たず事実をそのまま記述しており、かつ世界史ではなくして地方史、特殊史にすぐれた点が認められます。ドイツ歴史意識の理想主義的傾向に対して、イギリスは自然主義を基調とするとと言えます。ここにはロバート・グロッセテストやロージャー・ベーコンなどの自然科学研究史と相通ずる精神が感ぜられます。イギリス史学のこうした自然主義の傾向は、すでにベダに認められます。彼はその後のイギリス史学の発達に決定的な影響を与えました。ゴルブレスはイギリス中世史学の発展をグラフで示していますが、それによりますと、ベダが頂点です。ベダの自然科学への関心はよく知られていますが「De temporibus」 「De ratione temporum」により後世に大きい影響を与えた彼のクロノロジーは、そうした科学精神が歴史に適用されたものといえます。彼の代表的な歴史作品は「イギリス教会史」ですが、これは世界史でなくしてイギリス国民史です。彼は多数の文書を史料として利用し、しかもある程度の史料批判を行っています。口伝や間接の報道に対しては警戒の念を示します。「イギリス教会史」はこのよな実証主義的研究の上に立って、全体として調和の取れた作品になっています⁽²⁸⁾。ドイツの歴史哲学に比べてイギリスの自然主義的歴史記述の方が、近代史学に近いと思われま

一般に中世の歴史観についてはしばしば論ぜられますが、その歴史技術に関してはほとんど知られていません。中世には歴史思考はあったが歴史研究^{ツフオルシュング}はなかった、というのが通説のようです。これに関する研究も僅かです。19世紀の終りにラッシュが中世の歴史批判の発展について書き、⁽³⁰⁾今世紀の初めにシュルツが歴史の方法を論じています⁽³¹⁾。最近ではポイマン

のヴィドゥキント⁽³²⁾研究、ヴォルターのオルデリクス研究などの個人研究で多少ふれられている外、まとまった研究を知りません。シュルツによりますと、中世の歴史家達はまず第一に真^{ワエーリタース}実の追求を説いています。歴史の真実を得る方法としては、信頼出来る史料の利用があげられ、目撃者、口伝、文書などが信頼性の程度により区別されています。中世では一般に奇蹟、迷信、伝説がそのまま盲信される場合が多いのですが、その内容があまりに荒唐無稽である時、またその異教的内容がキリスト教と矛盾する時などには、これに対する疑惑と批判が加えられます。ラッシュなどの研究は歴史作品の序文などを中心として中世の歴史家はその課題、義務に関して述べた文章を集めて調べた結果です。その歴史家が真実を追求すると言っても、それは単なるレトリックであることも可能です。中世歴史記述の内容と表現との関係については、クルティウス⁽³³⁾やキルソンの⁽³⁴⁾教えるように、深甚の考慮が必要です。然し中世意識の中に、事実をそのまま記述しようとする精神、そのため事実を確定しようとする努力がある程度行われたことは認められます。こうした批判精神は、ソ連の学者などが説くように、教会と対立して教会の外で生じたものでしょうか。事情はもっと複雑のように思われます。ベダにおいては、真実の追求、史料の批判が、強いキリスト教信仰と混じています。キリスト教文化の完成期が、同時に批判精神の発展をもたらしています。然しまた他では、キリスト教世界観が事実認識、歴史批判を抑圧阻害した点も認めざるを得ません。歴史批判は教会支配が崩壊して初めて十分に発達し得たわけです。

キリスト教歴史観が西洋の歴史思想の発展に大きい影響を与えたことは否定出来ません。また中世において独自のキリスト教的歴史記述が展開したこともたしかです。然し中世の歴史記述の実際を見ますと、キリスト教の歴史理念と個々の歴史事実との間には、何らかの不調和が感ぜられます。いわゆる中世のキリスト教統一文化は、スコラ学やゴシック美術では美しいハーモニーを作り出していると言えますが、歴史記述の場合にはそ

のような高みにまで達していないように思われます。中世の、特に、中世盛期の歴史記述は、我々の想像以上に豊かですが、中世キリスト教文化の所産としては歴史記述でなくしてスコラ学やゴシック美術が、何と云ってもその代表と言うべきでしょう。それは当時の学者によって歴史が中心問題とされなかったためでしょうか。或は理念・原理・法則による把握に抵抗する歴史そのものの性格によるものでしょうか。

註

- (1) J. Spörl ; Das mittelalterliche Geschichtsdenken als Forschungsaufgabe. Historisches Jahrbuch. 53, 1933.
- (2) É. Gilson ; L'ésprit de la philosophie médiévale. 1948².
- (3) K. Löwith ; Weltgeschichte und Heilsgeschehen. 1953³.
- (4) H. Richter ; Englische Geschichtsschreiber des 12 Jahrhunderts. 1938.
- (5) O. Herding ; Geschichtsschreibung und Geschichtsdenken im Mittelalter. Theologische Quartalschrift. 1950.
- (6) H. Grundmann ; Die Grundzüge der mittelalterlichen Geschichtsanschauungen. Archiv für Kulturgeschichte. 24, 1934.
- (7) M. Manitins ; Geschichte der lateinischen Literatur des Mittelalters. III, 1931.
- (8) F. Heer ; Europäische Geistesgeschichte. 1953.
- (9) J. de Ghellinck ; L'essor de la littérature latine au XII^e siècle. 1954².
- (10) G. Schreiber ; Geschichtsdenken im hohen Mittelalter, Archiv für Kulturgeschichte. 32, 1944.
- (11) V. H. Galbraith ; Historical research in medieval England. 1951.
- (12) J. Spörl ; Grundformen hochmittelalterlichen Geschichtsanschauung. 1935.
- (13) Joannis Saresberiensis ; Historia Pontificalis. Introduction by M. Chibnall. 1956.
- (14) A. Dempf ; Sacrum imperium ; 1929.
- (15) W. A. Schneider ; Geschichte und Geschichtsphilosophie bei von St. Victor. 1933.
- (16) H. Grundmann ; Studien über Joachim von Fiore. 1927.
— ; Neue Forschungen über Joachim von Fiore. 1950.
- (17) K. A. Fink ; Joachim von Fiore und die Krise des mittelalterlichen Geschichtsdenkens. Grosse Geschichtsdenker (R.Stadelmann) 1949.
- (18) O. Beunner ; Die Krise des geschichtlichen Denkens im hohen Mittelalter-anzeiger des österreichischen Akademie des Wissenschaften. Nr. 8, 1954.
- (19) J. W. Thompson ; A historical writing I, 1942.
- (20) T. F. Tout ; The study of medieval chronicle. 1934.
- (21) Wattenbach - Levison ; Deutschlands Geschichtsquellen im Mittelalter. II, 1953.

- 22) H. Hoffmann ; Untersuchungen zur karolingischen Annalistik. 1958.
- 23) R. Latonche ; Textes d'histoire médiévale. 1951.
- 24) Anna-Darothée von den Brincken ; Studien zur lateinischen Weltchronistik bis in das Zeitalter Atlas von Freising. 1957.
- 25) P. Rousset ; La conception de l'histoire à l'époque féodale. Mélanges d'histoire du moyen âge, L. Halphen. 1951.
- 26) H. Walter ; Ordericus Vitalis. 1955.
- 27) The Cambridge history of English literature. I, 1949.
- 28) V. H. Galbraith ; Roger Wendover and Matthew, Paris. 1944.
- 29) W. Levison ; Bede as historian. Aus rheinischer und fränkischer Geschichte. 1948.
- 30) B. A. Lasch ; Das Erwachen und die Entwicklung der historischen Kritik im Mittelalter. 1887.
- 31) M. Schulz ; Die Lehre von der historischen Methode bei den geschichtsschreibern des Mittelalters. 1909.
- 32) H. Beumann ; Widukind von Karvei. 1950.
- 33) E. R. Curtius ; Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter. 1948.
- 34) P. Kirn ; Das Bild des Menschen in der Geschichtsschreibung von Polybios bis Ranke. 1955.